



Title	白系ロシア人F. D. モロゾフの在日亡命生活の経験について
Author(s)	ポダルコ, ピョートル エドアルドヴィチ
Citation	大阪大学言語文化学. 1998, 7, p. 115-127
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/78069">https://hdl.handle.net/11094/78069</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 白系ロシア人 F. D. モロゾフの在日亡命生活の経験について\*

ポダルコ・ピョートル・エドアルドヴィチ\*\*

This paper aids further analysis to the problems of Russian Emigrants to Japan, and of their ability to accommodate to a different cultural environment.

The first section addresses the general problem of so-called "White Russians" and its special features in Japan. It also provides the historical context of the phenomenon of Russian Emigration. Yet, in spite of the small number of Russians who came to Japan after the Revolution (1917), their contribution to the "westernization" of Japan in spheres such as food and light industries was as great as their contribution to Japanese culture. As an example, in this regard, the author explores the personal history of Fedor D. Morozoff and his family before they arrived in Japan in Sept. 1924. By then they had already been emigrants for seven years in such places as Manchuria (Harbin) and USA (Seattle). In Japan they settled in Kobe because of a variety of advantages offered to foreigners that they could not expect elsewhere. At this time rapid modernization was in progress in Japan, and those who took part in it, such as Morozoff, had a good chance of success.

In the second section, the author investigates the process by which Morozoff had created his business in Japan, and what problems he faced at that time.

The third section investigates F. D. Morozoff's instructions

---

\*Russian Emigrant F. D. Morozoff and his experience of life in Japan (PODALKO Petr Eduardovich)

\*\*言語文化研究科博士後期課程

and orders to his heirs. Special attention is paid to the analysis of F. D. Morozoff's memoirs, entitled *Legacy to My Heirs*. His memoirs are collection of reminiscences and survival tips for emigrants, gained through his own life experience. These concern such problems as business methods, communication between family members and employees, the importance of proper education, and others.

In sum, this paper contributes to research on issues concerning Russo-Japanese communication, based on a study of the patterns and the conditions needed to integrate the Russian family into Japanese society.

## はじめに

本研究の目的は、神戸に居留するモロゾフ一家（現・コスモポリタン製菓）の祖先 F. D. モロゾフ（1880-1971）の生涯・職業の経験から見た在日亡命ロシア人の生活、そこでの様々な障害とその克服の特徴を明らかにすることである。

研究課題は、モロゾフを例にしなから、日本における白系ロシア人の異文化の受容に関する問題点を考察することにある。また、いわゆるモロゾフが残した「子孫への教訓」は、彼が自分の経験をまとめて書いた自叙伝であり、これを重点的に調べてみたい。

## 1 「白系ロシア人」と日本

### 1.1 エミгранト（亡命者）の登場

1917年10月革命は、露帝国から全世界に向けて大量の難民を生み出してきた。「白系ロシア人」というのは、難民や移民、ソビエト政権に対立する白衛軍を意味するとともに、その敗北後に国外に亡命したロシア人庶民（農民、商人等）の総称である<sup>1)</sup>。日本に定住した白系ロシア人（日ソ国交が樹立された1925年1

---

<sup>1)</sup> 『ロシア・ソ連を知る事典』平凡社、1989年、454-455頁。

月 25 日以降、「無国籍人」となる<sup>2)</sup>は、少なくとも数千人と見られる。または、「外国人」としての登録がなされず、日本経由でアメリカ、カナダ等へ行く人々も多かった。彼らは、世界中に散らばった白系亡命者たちのごく一部を占めているに過ぎなかったが、日本文化（特に芸術、食文化等）への彼らの貢献は大きいものがあつた。日本における亡命ロシア人のなかで最も有名な人物は速球王として名を馳せた野球選手の V. スタルヒン（須田博）、バレリーナの E. パプロワ（ロシマ・エリコ）、洋菓子製菓の M. ゴンチャロフと F.D. モロゾフなどであろう<sup>3)</sup>。このなかで、ここで直接の対象とするのはモロゾフ一族である。

#### 日本における白系ロシア人とその増減：

1924 年末	ロシア国籍者	—	814 人
1934 年末	亡命者全体	—	850 人
1936 年末	亡命者全体	—	1310 人、その中に、東京：405 人、兵庫：399 人、神奈川：163 人、北海道：78 人が記録されている <sup>4)</sup> 。

日本に到来した白系ロシア人の特徴の一つは、欧米への亡命者に比し、インテリ層より庶民が多く、財産、知識、技能の面でその水準は高いものではなかったということである。そうした点から日本での職業も限られたものでしかなく、主として小売業、食料品（ロシア料理等）、布地・羅紗売りの行商といった分野が中心になっていた<sup>5)</sup>。大正後期・昭和初年の日本は、ちょうど着物から洋服への過渡期に入りつつあり、彼らの行商はそのような当時の日本にとって大きな役割を果たしていたと言えなくもない。こうした商売は日銭稼ぎに最も適していたようである。その中には、モロゾフのように行商して貯金に励み、工場やその他、生産活動のための資本を蓄積した者もいた。

<sup>2)</sup> それは、日ソ国交正常化以降となる。

<sup>3)</sup> Сто лет русской культуры в Японии. М., 1989；『ニューひょうご』兵庫県広告課、1983 年、3 月号。牛島秀彦『巨人軍を憎んだ男』福武文庫、1991 年。

<sup>4)</sup> Лазарева С. И., Сергеев О. И., Горкавенко Н. Л., Российские женщины в Маньчжурии. Владивосток. 1996, с.6-7. 『朝日新聞』1990 年 3 月 14 日。Kurata Юка. Российская эмиграция в Японии между двумя мировыми войнами: динамика, численность и состав. кн. Acta Slavica Iaponica, Tomus XIV, 1996, Sapporo, pp. 124-126.

<sup>5)</sup> Abrikossov D. I. Revelations of a Russian Diplomat. Seattle, 1964, p. 294, 300. 川又一秀『コスモポリタン物語』共同印刷、1990 年、28 頁。

## 1.2 モロゾフ一族とその亡命生活の経験

### モロゾフ家の略歴：

- 1880 フォードル・ドミトリエヴィチ・モロゾフ誕生。
- 1911 ワレンティン・フォドロヴィチ・モロゾフ（息子）誕生。
- 1917 故郷ヴォルガ地方発、ハルビンへの亡命。
- 1923 アメリカへ移住。その途中で初めて日本を知る。
- 1924 神戸に定住。行商等。
- 1926 洋菓子製菓を始める。
- 1951 コスモポリタン製菓設立<sup>6)</sup>。

フォードル・ドミトリエヴィチ・モロゾフ (F. D. モロゾフ) は、革命の起こった 1917 年まで、中部ロシアの町、シムビルスクの郊外で雑貨商を営んでいた第二ギルド商人の一人であった。モロゾフは、2 月革命後の様子を見た上、さらなる革命を恐れて、ロシアを逃げ出すつもりで財産を処分し、家族とともに亡命した。彼が町を出た日は、1917 年 10 月 25 日、革命の当日だったので、その意味で彼は「最初のエミгранト」であるとも言える<sup>7)</sup>。日本への移住の前にすでに 7 年程亡命生活を送っており、その経験があったため他の白系亡命者よりも条件が良かった。彼が中国のハルビンとアメリカのシアトルの後、次の移住地として日本を選択した理由は、先ず知人、人脈が存在し、加えて 1923 年に日本を通過した際に、少しばかり日本の事情に通じたからである。さらに、彼が神戸を選んだのは次の理由から容易に理解出来るであろう。それは日本での商売を考えた場合、日本人の需要ならびに販売市場の実際がまだよく分からなかったので、在日外国人が多く住んでいて、比較的予測が容易に立ち、リスクが少ないと思われた神戸あるいは横浜が最適と思われたからである。特に、神戸・兵庫には、明治から自治機関を持つ外国人居留地があり、大正後半には 21 ヶ国の領事館・公館（旧露帝国領事館も含む）があった。当時、神戸には約 5000 人の外国人が登録されていたが、1923 年 9 月 1 日の関東大震災後さらに多くの外国人が東京や横浜か

<sup>6)</sup> 出典：Морозов Ф. Д. На память потомству. Б.д.б.м. 前掲『コスモポリタン物語』。

<sup>7)</sup> 前掲 Морозов..., с.7.

ら移住し、外国人学校や宗教機関も増加していた<sup>8)</sup>。

こうして神戸は明治・大正にわたり欧米を中心とした近代文化を導き入れたウォーターフロントとしての役割を演じつづけたのである。貿易を介し、港町を中心にして、入ってきた欧米の近代文化は、日本の都市、家庭、個人の生活に新たな様式をもたらした。よく言われているように、日本は自己の伝統的な文化に、部分的に他国の異文化を取り入れることによって、それをさらに新たな文化として育ててきた。こうした状況において、神戸が果たした役割は、大正末期には、関東大震災によって横浜が壊滅的打撃を受けるに及んで、増々重要となり、その地位が相対的に高まっていたといえるのである。こうした状況にあって、神戸には既に300人位の白系ロシア人が居住しており、モロゾフらにも商売を通じて異文化を伝えることのできる環境が備わっていたのである。人種、言語、宗教、食文化が違う多様な神戸の社会の中で、白系ロシア人社会のつながりが濃密で、競争があるにしても、人間らしい暮らしができるという考えもあっただろう。

亡命したインテリ、軍人、そして上流階級の者たちは、ロシアの内戦が終了すると母国に帰るつもりで、いわばこの地での自らの生活基盤を整えることなく暮らしていたが、商人であるモロゾフには日常の生活に対する現実的な態度が備わっており、自分達の「過去」はもう戻ってこないことを、彼らよりも早く理解することができた。モロゾフの長所で最も目に付くのは、このような現実を受け入れる商人固有の姿勢、ものごとを決定する前の入念な事前調査などであり、生涯にわたって彼には無謀な行動は殆ど見られない。

上述のように、モロゾフは当初、それまでの白系ロシア人と同じく、布地の行商によって生計を立てていた。しかし、はやくも、1926年3月に“*Confectionary F. Morozoff*” (モロゾフ洋菓子店) という菓子屋を開店させることになる<sup>9)</sup>。その転換は神戸のもつ2つの条件に帰することができる。1番目の条件は、洋菓子は和菓子と違い、その材料の多くが輸入品にたよる必要があったということである。とりわけ砂糖、ココア、バター等の輸入には対外貿易港をもつ神戸は申し分がなかった。2番目の条件として、神戸には洋菓子・チョコレートの需要が見込める

<sup>8)</sup> 『神戸市史本編総説』平文社、1983年、645、698-703頁。『神戸市史・第三集、社会・文化編』太陽印刷工場、1965年、1163頁。『兵庫県大百科事典』神戸新聞出版センター、1983年、543、446-447、1029頁。

<sup>9)</sup> 『実録・野坂参三』マルジュ社、1997年、26-28頁。前掲 Морозов..., с.72-76。『エコノミスト』1982年10月号、68-69頁。

だけの外国人が居住していた点があげられよう。また、モロゾフの開業以前にも、森永・明治といったチョコレート会社があったが、それらは大量生産の板チョコや玉チョコが主力商品であった。つまり、外国人や日本の上流層の需要を満たす高級チョコレートがまだ生産されていなかったのである。船舶には特別な冷蔵庫はなかったため、その輸入も冬季しかできなかった。

F. D. モロゾフは、初めて菓子製造の技術を学んだのはハルビンとシアトルでの亡命生活のときであった。当時、日本でチョコレート製造に従事することになるとは思いもよらなかったが、亡命生活においてどんなことも意欲的に学んでいたことが、のちに役立ったのである。日本に到着してまもなく、この国には板チョコ・玉チョコがあっても、贈答品にできるような高級チョコレートが殆どなく、この地における自らの役割、成功の可能性をモロゾフは直ちに認識した。

## 2 日本における生活とその諸問題

### 2.1 教育・言語能力について

ハルビン、シアトルについて神戸を亡命の地に選んだことは、モロゾフ一家にとり、大きな転換点であった。なぜなら、日本は文化という面でこれまでの亡命地とは全く異なっていたからである。一番最初に直面した問題は、言語の分野における障害である。異国の地で生活をおくる上でのモロゾフ一家の弱点は外国語に対する知識の欠如であった。これにはいくつかの理由が考えられる。まず、亡命のため普通教育を受けられなかったことがあげられよう。ハルビン、シアトルと居住先が目まぐるしく変わり、腰を落ち着けて教育を受けることが困難であった。また、教育費の問題もあった。さらには、現地の普通教育は当然のことながら外国人を対象としたものではなく、言葉の問題が立ちはだかっていた。次に、それまでの亡命地の環境の問題がある。ハルビン、シアトルにおいては、同じロシアからの亡命者がかなり多く<sup>10)</sup>、中国語、英語といったその国の言葉の知識が欠如していても、ビジネスにも日常生活にもそれ程の困難をもたらさなかった。日本においてこれらの事情は一変した。特に、恒常的な、常設の企業活動の場合には、個人的な行商とちがって、「身振り手振り」ではとても用をなさないこと

<sup>10)</sup> Лазарева..., указ.соч., с.7-8. Российская эмиграция в Маньчжурии: военно-политическая деятельность (1920-1945). Южно-Сахалинск, 1994, с.5-7.

は言うまでもない。顧客をはじめ、会社の従業員など、一般的にモロゾフの周囲にはロシア語を理解できる人は少なく、コミュニケーションをはかる上での困難が存在していた。総会やその他の緊急時には、外国語の出来る亡命者（例えば、タタール人は短期間に日本語を習得した）に頼むことがあった。特に、この問題がより深刻になってきたのは、経営上のパートナーが出来てからである。通訳を恒常的に雇うことは経済的に不可能で、重要な用件の時のみプロの通訳を依頼することがあったが、それは実際上の問題として極めて稀なことではなかった<sup>11)</sup>。

こうしたなか、モロゾフ家の経済状況が安定・上昇するに伴い、教育にも特段に関心を示し、特に外国語教育にも注意が払われた。

#### 教育程度・言語能力に関するモロゾフ家の3代の実態：<sup>12)</sup>

- F. D. モロゾフ： 教会付属小学校、母語はロシア語、  
 (1880-1971) 英語、日本語は少々、会話のみ
- V. F. モロゾフ： 中学校程度、母語はロシア語、  
 (1911- ) 英語は流暢、日本語は会話、カタカナ程度
- V. V. モロゾフ： 大学院終了、母語は日本語、  
 (1946- ) 英語及びロシア語も流暢

学校の選択に際して、「キリスト教」、「英語教育」の2つがその条件であった。特に、「英語教育」ということに関しては、海外での教育の継続という面で英語を重視したという理由と、菓子製造に関する文献が英語を中心としたものが多かったため、更には商売に役立たせるためという3つの理由が存在した。上記の条件を満たすためには、外国人学校で学ばなければならなかった。また、そこでは国際的な思考を修得し、人種的偏見なしで、多文化社会を認識し得る環境がととのっていた。

3代目の子孫からは日本国籍を有し、日本語に関してもその知識、運用の面において、十分な能力を有していた。

<sup>11)</sup> 前掲『実録・野坂参三』、28-31頁。

<sup>12)</sup> 出典：前掲『コスモポリタン物語』、Морозов...

## 2.2 日本人とのパートナーシップについて

日本人との共同経営へとモロゾフを踏み込ませたのは、当時の日本の経済事情である。のちに「ブラック・サースデイ」と呼ばれる 1929 年 10 月 24 日のニューヨーク株式市場の大暴落で始まった世界大恐慌は、日本経済にも大きな打撃を与えることになる。中小企業の倒産が相次ぎ、失業者が増大するとともに国民の購買力が低下し、長期的な不況にみまわれた。

この時、F. D. モロゾフの洋菓子製造は既に 5 年の歳月を経ていた。不況下における経営の安定・発展のため、モロゾフは法人化を模索中であった。結局、神戸商工会議所の仲介で材木商を営む葛野友槌なる人物（宮下木材代表取締役、浪速製材社長、大阪木材市場取締役、神戸材木商同業組合長、神戸商工会議所常議員等を歴任した）を出資者として見出し、1931 年 6 月 11 日「神戸モロゾフ製菓株式会社」を設立することができた。契約書によると、モロゾフ家側の工場設備一切ならびに商標権は新しい株式会社のものとなり、モロゾフ父子はそれぞれ重役待遇の取締役と職人チーフとなっていた<sup>13)</sup>。

こういう共同経営期間は、1931 年 8 月から 1936 年 3 月までの 4 年余りであったが、早くも日本人とロシア人のパートナーの間に不協和音が生じていた。つまり、日本人パートナーの葛野友槌は血縁関係を軸に会社を運営し、安定的な経営をめざそうとしていた。同族会社化による経営の形は、日本人パートナーにとっては、以前から一番なじみのものであった。しかし、日本語も解らず、出来るだけ自分のロシア性・ロシア人の血統を守りたかったモロゾフの場合には、そのような縁故関係をつくることはできない相談であった。特に、葛野友槌の弟は、有名な共産党員の野坂参三であったので、白系ロシア人にはこういう付き合いが好ましくなかった。葛野のモロゾフ家との血縁関係化は実現せず、血縁化は葛野の息子と監査役・福本義亮（当時、神戸商工会議所常務理事）の娘との結婚という別の形で実現した。この同族化への流れはモロゾフと葛野との間の諍いに少なからず影響を与えた。監査役の中立性が保たれなくなっていったのである<sup>14)</sup>。

両者の諍いについては、1936 年 3 月 31 日、神戸区裁判所（現神戸地方裁判所）より和解勧告がなされた。その結果、モロゾフの要求が部分的に認められたが、他方、1926 年以来築きあげてきたチョコレート・キャンディの製造販売権を失い、

<sup>13)</sup> 前掲『実録・野坂参三』、28-29 頁。

<sup>14)</sup> 同上書、56-58 頁。

家族の姓でもある「モロゾフ」の商号使用も禁じられてしまったのである。さらに係争中に、モロゾフ父子は株主総会において他の役員や社員によって会社から追い払われる羽目になった。こうして1930年代後半以降、日本において「モロゾフ」という法人（現・モロゾフ製菓株式会社）、そして「モロゾフ」その人がそれぞれ無関係に並存していくことになる。

この事件の展開、裁判過程、和解勧告などの経緯を理解するためには、単にモロゾフと葛野の間の主張だけで判断することはできない。つまり、当時の日本を取り巻く国際環境とその影響を無視することはできないであろう。日本において1930年代はソ連脅威論が力を増してきた時代であった。「神戸モロゾフ製菓株式会社」の設立後、同じ年の9月、満州事変が起こっている。また、和解勧告が出された1ヶ月前に、2・26事件が起き、その年の11月には東西からソ連を牽制すべく日独防共協定が締結され、いわばこのピークを迎えている<sup>15)</sup>。ソ連政権を承認せず、日本に亡命した白系ロシア人も、この時代の日本では、官吏を含めて大部分の日本人にとっては仮想敵国ソ連からの「ロスケ」であったのではなかろうか。同じ白系亡命者のマカール・ゴンチャロフ（ゴンチャロフ製菓の創始者）も自分の洋菓子店を日本人をパートナーとして株式会社の形態で営んでいたが、1934年には会社の財産・商号も日本人パートナーに移る中、日本を去っている<sup>16)</sup>。ゴンチャロフの事件とモロゾフの事件は決して偶然の一致ではないであろう。1930年代という極めてイデオロギー色の強かった時代が、これらの事件を生み出したのである。

一連の出来事はモロゾフ家にとって深い傷となり、現在に至るまでも、設立発起人を数多く要する株式会社の設立を避けている程である。つまり、経営という面で日本人をパートナーとすることに對し不信感を抱いたのであろう。また、モロゾフ一家が日本に来て10年しか経っておらず、地元を受容されるにはまだ時間が足らなかった。とりわけ、第二次大戦後になるとモロゾフ一家は日本社会に完全に受容されていった。ロシアからの亡命者が神戸市民とともに戦争の苦しみを経験し、日本人と同じように生命の危機や財産の損失を味わったことにより、仲間としての意識が日本人の中に芽生えていったと言える。このことを裏付けるかのように、戦後直ぐにモロゾフ父子が受けた当局からの発注は、彼らの洋菓子

<sup>15)</sup> 前掲『エコノミスト』、69頁。

<sup>16)</sup> 『産経新聞』1981年11月24日号；前掲『ニューひょうご』、30頁。

店の復興の強力な援助となった<sup>17)</sup>。

戦後、会社の復興などが、商売の最前線に立ったモロゾフの息子、ワレンティン・フォードロヴィチ・モロゾフのもとで行われるようになった。既に60歳を越えたF. D. モロゾフは商売をやめて田舎の別荘に落ち着いて、91歳まで長寿を保ち、別荘で自分の回想に熱中した。再開した店も、最初は「ワレンティン」という名になったが、1951年には、社名を「コスモポリタン製菓」に改めた。

### 3 F. D. モロゾフの「家訓」とその特徴

モロゾフ家の遺産のなかで最も大切なものの一つは、F. D. モロゾフの自伝である。この自伝の大部分は1951-1954年にまとめられている<sup>18)</sup>。その中には、当時既に70歳を越えていた彼が自分の生涯を振り返りながら、次世代に役立つようにと遺した会社や個人の在り方に関する教訓も含まれている。特に、興味深いのは、彼の日本での生活経験が血肉化されていることであり、それらは幾つかのグループに分類することができる。

(その1) 先ず、「家族の役割」と他人との交際に関しては、友人や知人よりも家族や親しい親戚優先という考えが随所に見られる。友人、他人には裏切りの危険が常に残り、友情の重要性は認めながらも、その危険性に対しては注意せねばならないと戒めている。彼は有名なロシアのトロイカ（三頭だての馬車）の例をあげて、家族や広義の意味における家族企業の在り方を説いている<sup>19)</sup>。「トロイカの特質の基礎はその構造だと言われている。三頭のうち一番力のある馬が車を牽引し、左右両側の副え馬がそれを助ける。しかしテンポや方向の選択は全て熟練した御者のもとにあり、そのバランスが崩れるとその馬車は上手に走れない<sup>19)</sup>、という。家族、そして家族を中心とした会社の経営もまたそうであろう。個人的なビジネスの時代が過ぎ去ったことを確信した<sup>20)</sup>彼は、こうしたトロイカの例でもって、家庭・親戚を核にした組織的企業に対する考えを子孫達に理解

<sup>17)</sup> 前掲『コスモポリタン物語』、89-93頁。『実録・野坂参三』、32-33頁。Симонов К. М. Япония-46. М., 1977, с. 60-70.

<sup>18)</sup> 前掲 Морозов... , с. 4-6, 94, 115. Слово, 1991, №7, с. 13-14.

<sup>19)</sup> 同上書, с. 57, 112, 133.

<sup>20)</sup> 同上, с. 90, 100.

させている。

このような感覚も本人の個人的アプローチだけではなく、ロシアの商人・貿易の歴史に根がある。ロシア商人は古くから、文書に書いた正式な契約書を避け、「言葉で打ち合わせをして、そのまま信じ」、取り引きを結ぶ時に成約の印とする相手の手を打つだけの習慣だったため、真に頼れるものは、親戚をおいて他には存在しなかった。しかし、この背景には、モロゾフ自身が持っていた苦しい経験（パートナーシップの失敗・裁判件等）があり、その影響も決して無視できない。例えば、モロゾフ家が現在に至るまで、企業の経営ならば、なるべく株式会社の形態を避け、有限会社にすることを望んだことがその一例である。

（その2）次は、「子供たちの教育環境」についてである。彼は何度となく自分の無学に触れ、子供達にはできるだけ海外教育を受ける道を選び、他の会社で他人の飯を食べてから、自分の会社に戻るように説いている<sup>21)</sup>。子供達の教育環境を語る時、同時にこうした環境を支える会社の従業員を気遣うことを忘れてはいない。「子供達が学校や他の会社で学んでいるとき、頼りになるものは勤勉、実直に働く従業員」であるので、彼らに対してはお金を惜しまず、そして大切に扱わなければならない。つまり、味方に対して「ケチ」な態度は絶対に慎むべきである<sup>22)</sup>。

「コミュニケーション」を幅広く public relations ととらえるならば、それは「他人との関係を上手く処理する」という意味が含まれると考えられる。外国人が異郷の地に移り住んだら、日常生活の面においても、ビジネスの面においても、平穏な暮らしを送るためには、その地の知人をつくることが重要であることは論を待たない。

（その3）最後の点は商売全般についてである。モロゾフの商売に関しての信条は「正直」である<sup>23)</sup>。さらに高慢心があれば、たとえ富をなしていても必ず最後には失敗するとし、それを戒めている。特に、異文化環境における生活には、謙虚な態度を守らなければならない、と強調している。彼は向こう見ずな「勇気」よりも、地道な忍耐強さを重視する。日本における亡命者の場合、正直さをモッ

<sup>21)</sup> 同上書、c.6、57-58、82。

<sup>22)</sup> 同上書、c.57、100。Слово..., c.13-14。

<sup>23)</sup> 同上書、c.90-92、119、129-132。

トーとした活動をする以外にはなく、それが却ってモロゾフの名を高めることになった。特に、彼の「正直」についての見解は、興味あるところである。たとえば、一般に商売の方法としての駆引き、いわゆる戦術的トリック等が十分有り得ると本人も認めている<sup>24)</sup>。なぜなら商業の基礎は、客を誘い込むことであるから。モロゾフ自身も、明治・大正の日本においてはドイツ・ドイツ製品が高く評価されていることを知っていたので、行商した時に、売り上げのために「ドイツ人」のふりをし、ドイツ人に成りすまそうとしたことがある。言葉を知らないにもかかわらず、身振り手振りだけでもかなり成功した。しかし、本人によると、商人の場合に最も大事なポイントは、品質である。それは、客に対して、一度買った物に対する後悔を後で絶対に起こさせないために、良いものばかりを売らなければならないという信条である<sup>25)</sup>。つまり、外国で長期間にわたって生活する場合、異国で商売をする場合、どんな状況であっても仕事に対する誠実な態度を貫かねばならない、という意味である。

回想録がまとめられた 1950 年代半ばには、モロゾフは、裁判による負の影響・戦争の被害等をいまだ克服することができなかつたので、回想録からはこうした影響を読み取ることができると考えられるのである。自分のアドバイスのなかに、「リスクを避けて」、「裁判所までいってはだめ」等、いわば「出るクイは打たれる」の意味のある警告が何度も繰り返されるのである<sup>26)</sup>。

## むすび

F. D. モロゾフは祖国を捨て、財産もなく体ひとつで日本に移住し、多くの辛酸をなめながらも、異郷の地で成功をおさめた亡命ロシア人である。政治的にも、経済的にも、在日居留の無国籍、換言すれば「白系ロシア人」の異国での生活はそれほど容易ではなかつた。言うまでもなく、そのような人達の生き方、考え方、人生観等を調べるのは非常に興味深く、将来のためにも有益なものとなろう。F. D. モロゾフの遺した回想録における「家訓」は、日本に住んだ一人の亡命ロシア人の偽らざる告白であり、在外生活を行う一家の物語である。文化、歴史、文学的視点から見て、大に価値がある。これからの日露交流の発展のために、先

<sup>24)</sup> 同上書、c.12、64-67、112-115。

<sup>25)</sup> 同上書、c.32-33、34-35、43。

<sup>26)</sup> 同上書、c.84、86、108。

人・前世代よりの経験は貴重なものである。また、「国際化」という新しい情勢のなかで、亡命者の異国での生活の在り方を解明することは、大に意義のあることと思われる。

## 主要参考文献

- 『神戸市史・本編総説』平文社、1983。  
『神戸市史・第三集、社会・文化編』太陽印刷工業、1965。  
『ロシア・ソ連を知る事典』平凡社、1989。  
『兵庫県大百科事典』神戸新聞出版センター、1983。  
『朝日新聞』1990年3月14日。  
『産経新聞』1981年11月24日。  
『エコノミスト』1982年10月号。  
『実録・野坂参三』マルジュ社、1997。  
『ニューひょうご』兵庫県広告課、1983年3月号。  
牛島秀彦『巨人軍を憎んだ男』福武文庫、1991年。  
川又一秀『コスモポリタン物語』共同印刷、1990年。  
Abrikossow, D. I. *Revelations of a Russian Diplomat*. Seattle, 1964.  
*Acta Slavica Iaponica*. Sapporo, 1996, Tomus XIV.  
*Russian Review*, 1966, July, №25.  
Лазарева, С. И., Сергеев, О. И., Горкавенко, Н. Л. *Российские женщины в Маньчжурии*. Владивосток, 1996.  
Морозов, Ф. Д. *На память потомству*. б.д.б.м.  
*Российская эмиграция в Маньчжурии: военно-политическая деятельность (1920-1945)*. Южно-Сахалинск, 1994.  
Симонов, К. М. *Япония-46*. М., 1977.  
*Слово*, 1991, №7.  
*Сто лет русской культуры в Японии*. М., 1989.